

○30番（谷口攝久君）〔登壇〕

本日最後の登壇でございます。精いっぱい頑張りたいと思います。

発想の転換ということが、やはり今後の課題の中にきちんと出てまいります。市長の施政方針の話の中にも、あるいはいろいろと熱っぽく訴えられる言葉の中にも、やはり武雄市の発展のためには、ある時期、発想の転換をし、思い切った行動をやらなきゃいかんということが随所に出てまいります。

私はまず最初に、発想の転換の中で、今までの論議を踏まえまして、例えば、伊万里の工業用水があつたハイテクのいろんな企業を誘致したときに、どうしても水が足りないと。そういう中で、武雄の水をやれないかという話も論議の中に出てまいりましたし、また、前からそう考えておりました。ところが、コストがどうかとか、あるいは水利権の問題とか、いろんな問題がございます。

そういう中で、本当言うと角度を変えて考えれば、これは大田副市長の領域になるかと思えますけれども、例えば、伊万里で企業誘致をして1,000人の社員がおると。そういう中で、伊万里で採用されるのは大体65%ぐらいが地域の方である。あと35%といいますか、そこはいわゆる市外の人から従業員というのですかね、社員として雇用されると。じゃ、雇用問題として考えたときに、これは非常に思い切った発想の切りかえですけれども、工業用水のお金は武雄でも実際には赤字を出しているわけですから、その分は同じならば、一銭も要りませんと。全部使ってください、無償で提供しましょう、そのかわり35%は武雄の人を採用してください。仮にそういう形が実現可能性としてあるとすれば、むしろ工業用水の水道料を今のコストで伊万里市なりからもらうよりも、雇用を拡大した方が武雄にとってプラスではないかと。そういういろんな角度の考え方があるんじゃないかという気がして、議会での答弁、あるいは質問を聞いておったわけでございます。

そういう場合に、雇用対策、いわゆる武雄市の働く人をふやす。また、若い人、お年寄りを含めまして本当に雇用を拡大することによって、財政的な問題についての一つの方向性を示していくということも非常に大事な問題ではなかろうかという気がいたします。

きのうから夕張の問題がたくさん出てまいっております。私も「朝ズバッ」を見ておりましたら、私たちはメロンのことがはっきりイメージにありました。北海道に行きましたら必ず夕張メロン、あるいはメロンが高いからメロンの味をしたチョコレートを買ってくると、そういうぐらいに夕張というのはイメージとしても、知名度も高かったわけです。武雄よりもはるかに夕張メロンの方が名前が高い、残念ながらそういう感じをしておりました。ところが、今や夕張はワーストワンといいますかね、財政破綻をしたまちで、どうしようもない状態で住民がみんな逃げ出しているんだという話が出てまいります。

その中で、私が考えましたのは、実はきのうの「朝ズバッ」でみのもんたさんがこう言っておりました。調査によると、今、夕張市にお年寄りは住めなくなっている。あるいは若い

人もどんどん出ていってしまっていると。このままではゴーストタウン、死のまちになるんだと。そういう中で、実はもっと残念なことがあると。市の職員の75%は、できるだけ早くやめてよそに出たいと言っていると。こういうまちで本当に市全体が市民のための行政ができるんだろうかといったような意味の言外ににじませた発言があってあったわけです。船が沈もうとするときは、ネズミはどんどん先に出ていって逃げてしまうという言い伝えがございます。本当にそういう土壇場のときこそ、しっかり自分たちだけでも踏みとどまってまちをよくしていくんだという気概、そういうものがやはり市政を預かる者にも、あるいは市の職員として、あるいは行政の一員として頑張る者も、議会もともに頑張っていかにやいかんの、そういう状況だとすれば、夕張がああいう破綻を来したことは、そういうところからも来ているんじゃないかなろうかという気がしてならなかったわけでございます。

「他山の石もって玉を磨くべし」という言葉がございますけれども、私は一般質問の通告の中で、夕張の問題が他山の石として、私たちのいわゆる市政運営の中に、あるいは市のいろんなものの中に生かしていけないだろうか。いわばそういうふうな体験の一つを逆に考えていけるんじゃないかなろうかという気がしてならなかったわけでございます。

そういうわびしい話はここに置きまして、楽しい話をまず冒頭持ってきたと思います。

それは市長も喜んでもらおうと思いますけれども、既に御承知のように、実は18年10月13日の新聞に県内の観光施設の満足度というのが出ておりました。その満足度は宇宙科学館が第1位だと。第2位は吉野ヶ里歴史公園であると。佐賀県に来た観光客といいますか、そういうふうなツアー客の満足度を調査した中で、とにかくファミリーツーリズムの運動の夏休み向け企画の中での調査でございますけれども、いずれにしても、夏休みに向けての企画は7月15日から8月31日まで県内24の観光施設で開催されていますけれども、その中で、とにかくまずナンバーワンは県立宇宙科学館だということが出てきたんですよ。武雄が1番になったのは久しぶりですよ。「がばいばあちゃん」で一生懸命、今、新聞に、いわゆるマスコミに登場するナンバーワンも武雄ですけれども、この宇宙科学館の施設が本当に来てよかったと、もう一度来たいということのナンバーワンになったことを皆さんの前に報告できる。これはともに宇宙科学館の誘致運動をやった者の一人として、とてもうれしいことですから、あえて冒頭にこの問題を申し上げたわけでございます。

実はもう一つ、この宇宙科学館と夕張市との関係があるわけですよ。どこであるかというのは、宇宙科学館の誘致運動をしましたときに、いつか申し上げたと思いますけれども、佐賀県立歴史資料館の運動から始まりました。その歴史資料館運動が、県は佐賀市につくりたい、だから、武雄市は余り運動をせんでほしいということを内々武雄のいろんな方に言ってあったのは事実でございます。しかし、私たちはこの機会を逃したらば、歴史と文化、先ほど市長も答弁をされましたけれども、まず大事なのは歴史性、文化、そういうものが脈々と続いてきているから同じ温泉でも値打ちが違ふんですよと、いみじくも市長は申されました。

それと同じように、歴史と文化を誇る武雄こそ、まさに県立歴史資料館、今は佐賀城本丸歴史館になっていますけれども、あれこそ武雄が一番ふさわしいということで運動をし、それと佐賀市がまさに激しいせめぎ合いをいたしました。そのときに武雄市民は一体となって、あっという間に全市民の署名が集まって、その大会を――市民推進運動大会だったわけですが、そのときに私はその推進委員長、実行委員長をやらせてもらってありましたけれども、まず、私が最初やりましようと言ったのは、今、武雄市の図書館・歴史資料館にあります日本で最初に日本人の手でつくった大砲を佐賀の市役所に向けて、玄関に据えまして、できれば一発ぶっ放したかったわけですよ。そういうことまで、いわば気持ちを高めるためにやりましたけれども、「谷口さん、それだけは勘弁してください。もし壊れたら文化財が大変だから」という話でありましたけれども、それくらいにみんなの気持ちを高めていくと。

今回の「がばいばあちゃん」の問題についても、いろんな論議があります。いろんな批判もあります。しかし、私の考え方の中には、やると決めてやるなら、とことんやりなさいと。ツアーの募集が今あってありますけれども、宇宙科学館を誘致するときは、これは距離的な問題もありますけれども、バス7台、婦人会から老人クラブからあらゆる団体にみんな参加してくださいといって、バスが足りないので次々にバスを発注して、そして、バス7台を連ねて県議会の議事堂を占拠するぐらいの人数で、廊下は全部武雄市民で埋め尽くしたぐらいの運動を展開したわけです。だから、これは次元が違いますけれども、例えば、今度議会は22日ですけれども、21日は休みですから、できたら市長も先頭になって、それこそ東京まで行ってもらって、その日は休会ですから、議会中であろうが行ってもらって、どんどん運動してもらおうと、それくらいの気持ちで――例えばですよ。考え方としてはやってもらっていると。ただ、問題は一つあるわけですよ。そういったような問題についても、やはり市民の方々に十分理解を求めて、よし、やりなさいと後押しをされるような段取りをして、これは執行部のほかの人の努力も必要としますけれども、やっていただきたい。そういう気持ちであれば、私はやりかかった以上はとことんやるということが大事じゃなかろうかと。要するに途中でやめたんでは効果が薄れるわけですよ。本当の効果は出ない。私はいろんな市民運動をともにやってきた中で、そういうことを感じております。

そういうふうな問題と同時に、この入館者数にいたしましても、本当に県立宇宙科学館は、もう一つ、今は指定管理者制度で、いわゆる今までのように県が直接じゃなくて、幸い宇宙科学館を最初設計企画したところが指定管理者になったために、いろんな催し物も積極的にやっていってもらっております。それを武雄市が大いに活用しなきゃいかんわけですよ。そういうふうな問題を含めまして、まず質問としては、そういうふうな武雄にある財産というものをどのようにして市の今後の発展に生かすかという問題を考えていただきたい。このところについての取り組みを聞きたいと思います。

同時に、武雄市は文化と歴史のまちでございます。その文化と歴史をどう生かしていくか。

よそにないものがせっかくあるんだから、最高に生かしていくような政治の仕組みが大事ではないかという気がいたしますが、その点についての市長の考え方、あるいは関係する教育長の考え方も承りたいと思います。

ただ、私は思います。今までは武雄市の文化課がありました。今、文化課がないわけですよ。文化を誇るすばらしい武雄市に文化課がなくなっているわけですよ。文化係はあります。私が申し上げたいのは、生涯学習課というのは非常に大事ですけども、生涯学習というのは一つの手段です。文化は基本です。ですから、子ども部をつくるとおっしゃるなら、文化課は要らんから文化部をつくってもらって、そして、本当に頑張るような立場で思い切った方向を示していくことも大事ではないかと思います。それについては、教育長の考え方を承りたいと思います。

きょうはいじめの問題を含めまして多くの問題があります。ですけども、まず冒頭、その２点についてお尋ねをし、あとはじっくりと質問をしていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

私もじっくり答弁をしたいと思います。

まず、「がばいばあちゃん」の20日、21日の件であります。これについては、飛行機がとれんやったですね。年末にかかわって、なかなか行けんということと、私も行きたかったんですけど、実はその日に子どもたちと語る会をセットしたいという私の意向で、そちらの方を私としては優先をしたいと。「がばいばあちゃん」よりも、そちらの方を優先するということで、私自身はちょっとそれは裏方に回っている次第であります。ただ、東京のあちこちに電話は私自身しておりますので、きっと盛り上がって、これは新聞、テレビにいっぱい出ると思います。皆さんもんぺで行かれますので、ぜひ注目をしていただければありがたいというふうに思っております。

もとより一生懸命PRをしております。その上で答弁に入りたいと思います。

武雄にあるものの取り組み、まず、私が一番驚いたとは、固有名詞は上げません。ある陶芸家の方で、私は大阪にいました。大阪で「この陶芸家の方は武雄です」と言ったら、「ああ、武雄ですか」と知っとんさるわけですね。しかし、武雄に戻ってきたときに同じような年齢層の人に聞いたら、だれも知らんやったですね。だから、市内で全く知られておらん。逆に、大阪とか東京で知られている。こういった方々は一流の陶芸家の方です。あるいは染色家の方がいらっしゃいます。こういった方々がいっぱいおんさるわけですね。だから、そういった方々を、例えば、一つの案としては、エポカルで個展なり、二人展とか、若手展ができるようになればいいなと。しかも、私はそこでお金を取ってよかと思うとですよ。し

かも、陶芸だったときには、それをちゃんと売ると。そういうふうな手だてができないかということで、今、教育委員会と実は協議をしております。

その上で、エポカルという名称です。調べてもらったら、あれは公募で決まったと。誤りだったら教えていただきたいんですけども、やっぱり横文字は浸透せんですね、キルンとかエポカルというのは。だから、そういう意味で、この際、名前を変えて、本当に市民に親しまれるような名前、これはいろいろあると思います。固有名詞をつけるなり、地名をつけるなり、そういう意味で、あそこを文化発信の拠点にしていきたいというふうに思っております。

それと、文化の件であります。文化部をつくったり、文化課をつくったり、文化係と、これは人の問題と私は思います。したがって、私は谷口議員のごたる文化人とともに、私自身が文化人にならばいいかんというふうに思っております。そういう意味での御指導、御鞭撻をお願いしたいというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

○30番（谷口攝久君）〔登壇〕

私も文化人と言われると、ちょっと面映ゆい感じがいたしますけれども、しかし、今のエポカルの話については、私もちょっと考え方で、公募でいい名前はいただいたと。それはそれでいいんですよ。ですけれども、その経過の中で、昔ですね、要するにエポカルという温泉センターみたいなのが既にありまして、それが先着のエポカルであったわけです。しかし、公募して本人が最初の発案だとおっしゃれば、それはそれとして。ところが、役所はまじめですから、どうしても、教育委員会は特にまじめなところですから、せっかく公募して予算を使った以上はエポカルを使わにゃいかんという気持ちでおられたと、私はそういう理解をしているわけですよ。ですけれども、市長がそういうお考えであれば、やはりエポカルではなかなか情報発信がですね、エポックカルチャーというんですかね、そういうのじゃなくても、本当にすばらしい歴史的なものを持っている武雄ですから、文化的な、例えば、オランダですから、武雄蘭学館という名前だけでも既に情報の発信ができるでしょう。特に、蘭学なんていうのは最高ですから、武雄にとっては本当に、武雄の次に蘭学について頑張ったのは福沢諭吉ですからね。福沢蘭学塾というのをつくって、慶応大学の前身になったぐらいですから、とにかく蘭学を武雄がきちんとやったということが歴史的に証明されるような、そういう観を全面に出してもいいんじゃないかという気がするわけです。

その点については、市長のお考えは十分わかりました。どうかひとつそういう線に沿って御検討、頑張ってくださいと思います。

文化の問題については、教育長もいろいろ考えがあると思いますけれども、その点については市長が申されましたので、文化部をつくるつくらないの問題については、これは答弁は

結構でございます。

ただ、問題は、今から幾つか問題点を取り上げてまいりたいと思いますけれども、いわゆる文化課の活動の中で、図書館の問題がございます。しかし、その前にもう一つ、やはり武雄の歴史文化のストックというのをどう生かすかというのが大きな命題だということで、これは関係課にも資料としては提供いたして、私も資料を持って、執行部も持ってもらって、同じ視点でやりたいというのが私の持論ですから何でも差し上げておりますから。

そういう点で、ひとつ考え方でございますが、実は流鏝馬ですね。ことしの流鏝馬は3,000人近くの方がお見えになって、確かに特別観覧席もつくってもらって、臨場感のある行事として非常に好評でした。うれしゅうございました。流鏝馬の観覧席をつくることについては、やはり今までの流鏝馬を支えていただいたそれぞれの区の代表の方ですね、いわゆる20何区の代表の方々をお招きした。あるいはもう一つは、武雄の春秋会といいですか、県から、国から、いろんな地域から武雄に来てもらっている各省庁、団体の代表の方々等を、いわゆる文化財審議委員を含めまして、そういう方々をお招きする場所との関係があって、いろいろと調整の時間もありましたけれども、少なくとも臨場感にあふれた行事ができたということを感じています。

その中で、私もいろんな紹介をしながら言い忘れたことが一つあったわけですよ。ちょうどタイミングの問題がありまして、一番大事なことを紹介できませんでしたが、流鏝馬の行事の中で本当に一番大変な役は、衣装を着て勅使になった方とか射手さん、そういう方々も大変でしょうけれども、もう一つ、本当にこの役だけは大事だというのが実はあるわけです。それが、資料によりますと後詰という仕事がございます。資料を皆さんもお持ちになっていると思いますけれども、要するに行列の一番最後に、今は軽トラックですが、軽トラックにスコップとほうきとバケツを持って乗っている方が何人かいらっしゃいますが、その方々が一番大事な役なんです。それはなぜかということ、馬は生き物ですから、おしっこをしたり、あるいはお漏らしをしたり、大きいのを落としたりします。そういうときに、それをぱっと行って拾って掃除をして、また車に、そういう清掃係がおるわけですよ。実は昔はそういうのはなかったわけですよ。馬が走って行って漏らすと、あるいは落とすというと、みんな喜んでそこに集まって行って足で踏んで、これで馬のように足が速くなるよと、馬のように元気になるよということで、みんな足で踏んで、喜んで馬のふんの周りに集まってきた、そういうのが歴史の背景にあるわけです。商店街へ行くときも、ああ、家の前でうんを落としてくれたと、運がうちに入ってくるんだということで、みんな大喜びで自分の家の前にあったふんを。ところが、今は本当にその係が一生懸命すくって行って、そして、ちょっと簡単に掃除をして、すぐ車に持っていくんですけれども、そういう中で、実は終わった後、責任者を出せと行ってよく電話がかかります。何かといたら、やっぱり私が責任者になって、何でしようかと言ったら、どういうことですかと。馬のふんを片づけていないと行って、

タクシーで飛ばしていかにゃいかん。行ってみると、確かに掃除はしたんですけども、馬のふんのわら切れか何かがちょこっと残っておるのを痕跡が残っているという指摘をされるわけですよ。そういう時代ですよ。本当は自分の家の前であれば自分たちで片づけてもらったらいいと思うんですけども、主催する立場になると、なかなかそうはいかんと。ことは馬場の中ではそういうことがありませんでしたけれども、馬場の中でもしあったときは、武雄高校の弓道部の生徒さんにその役をお願いしようと、馬場の中だけ。それくらい内々の話をしてあった。そういう配慮をして行事があるわけです。ところが、なかなかお祭りの表舞台と、それから、その裏にある仕事というのがあることが、行事の華やかさに隠れて、そういうこともございます。

しかし、そういうものを積み重ねてきて、ああいう伝統的な歴史的な行事があるわけですけども、実は一つだけうれしいことがあります。それは、市長はとにかくお祭りとか、そういう行事は市を挙げて、みんなが盛り上がってせにゃいかんということを常に申されますし、私もそう思っています。ところが、市役所は今、市民サービスということもあるでしょうけれども、くんちの日は午後休みじゃないわけですよ。昔、市役所は午前中だけして、午後からは地方祭について休みといって、保安要員というのはおかしいですね、済みません。窓口の業務をする人だけ残して、あとは全部お祭りの行事を見に行けということであったわけですよ。ところが、いつのころからか、実は市役所は――関係する学校は生徒を早引きさせて見学に行かせてくれます。そういうふうにやっています。ただ、銀行も今は休みでなくなりました。何で休みにせんのか不思議でたまらんですけども、地方祭というのは大きな節目なわけですよ。ですから、自分たちのふるさとと思うならば、トンテントンにしても、それは確かに唐津の曳山にしても、博多のどんたくにしても、みんなが自分たちのまちの行事だということで喜んでやっているのに、そして、いや、まち全体でやりましようと言いながら、なかなかそこの対応はできておりませんけれども、それについてはどうなんですか。

私、一つだけ事例を申し上げたいと思いますが、市長は目の前にいらっしゃいますからですけども、副島整形外科ですね、副島病院、あそこはおくんちの日は全部張り紙して、どんな患者さんがいっぱいでも、本日はお休みしますと。担当の看護師さんだけ残して全部休みです、おくんちの日は。そして、流鏝馬の行列が来ます、馬が行きます、そうすると、理事長――院長さんがちゃんと待って、そして、ニンジン馬を馬に食べさせてくれます。それは馬にニンジンをやるといことの中にある、いわば自分たちのふるさとを大事にしようという思いで、そういうのがわずかに武雄で残っているのは副島病院ただ一つなんですよ。そういうことを考えたとき、本当にまちの行事を盛り立てるためには何らかのそういうアクションも必要じゃないかと。やっぱりこういうことはきちんと知らせてやるべきじゃなからうかという気がいたします。

実は今の理事長さんもその日はお休みで、馬のことをしてもらいました。流鏑馬も続けていくためには、やはりどうしても後継者の育成がありますし、武雄は歴史的に馬が1頭もないまちになってしまったんですよ。ですから、何とかして馬の準備をしたり、若い人たちが馬場を準備して、馬の練習を通常できるようにしたい。ところが、馬をどこから購入するかということになったときに、私は区長さん初め、若い連中と一緒に、実は副島病院の理事長は日本中央競馬会の理事をなさっています。そして、武雄にそういう伝承的なものをやるとするならば、中央競馬会から名のある馬、ハイセイコーとかスピードシンボリなんていうのは無理かもわかりませんが、とにかくそういう名のある馬を武雄に持ってきて、そうすると、武雄の観光資源にもなるし、人も来るわけですよ。馬好きの人は日本じゅうから見に来ますから、そういうことでもってやったらどうかと。市がそういうことに対して前向きであれば私も一肌脱いで、馬の5頭か10頭ぐらひはちゃんと馬運車に積んで持ってきて無償であげるとまで言っていたいたわけですよ。

そういう立場で、市長もまちづくりについては非常に前向きですから、それについては恐らく共感いただけるものと思いますけれども、とにかくみんなでお祭りをつなげていかないと大変だということが、これは武雄市にとっても、あるいは武雄に来た人が楽しめる行事がないと人はやっぱり動いてきませんので、そういう意味では、そういう資源の取り扱い、それから、行事等についてのお考えがあれば市長の所見を伺いたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

私も基本的な方向は一致しています。岸和田にだんじり祭というのがあります。私は実はあれの裏方に入って、一生懸命盛り上げた経験もあります。ほんなごてぶつけられて、吹っ飛ば一歩手前まで行って、それぐらひやっぱり盛り上がります。あれはまち挙げてやっています。そのときに、実はあれは平日にしよんさったわけですね。これもずっと歴史がありますので、平日にしよんさった。そのときに市役所がどうなっていたかというぎ、やっぱり市役所は通常業務ばせんばいかんやっさと。それは何ですかと私も聞いたわけですね。そいぎ、世の中、お祭りばかりの人はおらんと。物すごく困った人たちが行政の窓口に行ったときに行政が全部出ていった、あるいは大部分出ていったときに、果たしてどがん思いんさるですかというとは、その当時、私は聞いたわけですね。

だから、そういう意味での今の行政のかかわり方というのは私は実は非常に難しいと思っています。私個人的には、休みを全部とって、地域の祭りであるとか、あるいは流鏑馬であるとか行くべき。昔はそうやったと思います。しかし、今現代的に考えた場合に、本当に有権者、納税者の方々がそれで納得できるかといったときは、私はちょっと足踏みをします。

その上で、もし可能ならば、実は岸和田のだんじりは、ことし初めて土、日開催になりま

したね。そうすると、一般の働きよんさる市民の皆さんであるとか、あるいは我々職員一同こぞって応援できるわけですね。私はあの祭りの魅力からするぎんた、3,000人が1万数千人に私はなると思います。しかし、やっぱり歴史の連続性であるですね。だから、あれをどっちをとるかというのは、今回議会で私もよく言いますけれども、それは選択の一つの問題かなというふうに思っています。もとより23日が絶対よか、これは外したらいかんというお気持ちもよくわかります。しかし、今現代の祭りの状況を考えた場合に、あの岸和田のだんじり、あるいは唐津くんちですね、あれもたしか週末にあるというふうに聞いております。だから、そういう意味で、そういった開催もできないかと。祭日にする分は神事でしていただいて、その直近の土、日にですね、ある意味、言い方は悪いかもしれませんが、イベントという形で持ち込むことができないか。そうやってきた場合には、我々はこぞって応援をしたいというふうに考えております。これは議論を呼ぶところだと思いますので、提案にとどめたいというふうに思います。

○議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

○30番（谷口攝久君）〔登壇〕

今の市長のお祭りに対する考え方については、よくわかります。やっぱり流鏝馬の保存会なり実行委員会でもいろんな検討をして、だんだん高齢化して、若い人たちの手が足りなくなる。本当にお年寄り元気ですけども、もし何かあったときには心配というぐらいに、やっぱり的を担いするのは武雄高校の弓道部の人たちが、いわゆる流鏝馬の基本は弓ですから、そこから協力をしていただいておりますけれども、なかなか進学校でもありますし、ことしは20何名が参加しています。そうすると、問題が出てきたわけですね。実はクラスが30人か40人のところに15名ぽつと減ると授業がなかなかという問題とか、ことしまではしてもらいましたけれども、そういう問題も出てくると。ちょうど土、日であれば、やはり御父兄の了解を受ければ学校はオーケーだという感じで、非常に協力的ではございますけれども、やはり主催をする側としても配慮して、八並の区長が全体の総括をいただいておりますので、区長と一緒に高校に行くとか、そういうことで、いわゆる単に八並区の行事じゃなくて、市全体の流鏝馬の行事としての取り組みをやらせてもらっているわけです。

だから、山内の流鏝馬のこともいろいろお話がございましたけれども、実は財政負担は、例えば、武雄市内の流鏝馬関係は、旧武雄町の全区と、甘久、黒尾、繁昌、その3区は区民の方全部が年間200何十円かお金を出して、この行事を支えていただいているわけですよ。補助金ということじゃなくて、そういうものを出して、みんなで運営をしているという珍しいー珍しいというのはおかしいですね。歴史的に続いた行事なわけですから、何とかしたい。ところが、流鏝馬の23日というのが歴史的な形になっておるもんですから、そういうことで、土、日になるときが7年に1回ですから。ところが、12年に1回は、土曜日にしたら、

今度は日曜日にできると思ったら、とんとんと月曜日に飛んでみたりしますもんね。うるう年とか、何とか年とかいろいろあって苦労がありますけれども、今おっしゃったように、私たちできれば神事ということはきちっと23日に歴史と伝統を守ると。それからまた、そういうふうな流鏑馬の市民とともに楽しむお祭りはということも、やっぱり今後検討課題にしていかと、ずっと続けて、今、800年ですから、これば900年にするのは大変だろうという気がしております。でも、1,000年続いたら立派なもんだと思います。

ところで、実は1,270年続いた行事が武雄にあるわけですよ。天平年間からも実はあります。それは武雄神社が今の場所に移ったのが天平7年か10何年ですが、それから逆算すると大体1,200何十年になりますが、実は来年はいのしし年ですね。それがイノシシに関係ある行事なわけです。これはチャンスだなと。何とかチャンス、またあれが出てまいりますけれども、実は前に計画をして、古賀副市長あたりも御存じと思うですけれども、実際はやりたいなと思って計画を進めたけど、O-157というのですかね、食べ物が何とかという。あれが出てできなくなって、計画が中途半端になったことがあるんですが、実は歩射（びしゃ）祭りといひまして、実はそれが佐賀県で一番、九州でも古い行事なわけですよ。福岡では歩射（ふしゃ）祭りとか、そういう行事がありますけれども、その行事が2月17日にあります。その神社の行事のときに、必ずイノシシを2頭とウサギを2羽と、それから、何とかという鳥ですが、これは著書はありませんけれども、それをお供えして、そして、直会を集まった人みんなで神様と一緒にイノシシを料理して食べるという行事があるわけですよ。ですから、1,270年たてば、多分市長であれば恐らく振る舞いは、1,270年たっていれば、ことしは1,270年だから1,270人には無償でシシ汁をごちそうするとか、そういうふうな発想になれると思いますけれども、そういったような行事をして、ただ、物産祭りのときに武雄競輪場でカニ汁をごちそうするのと同じように、武雄にああいうのがありますから、そういうやり方はできんだろうかという検討をして、やってみようかという話になって、そこに富永議員もいらっしゃいますけど、イノシシは私が持ってきていいというぐらいの話をしてもらった経過もあるわけですよ。そういうふうなところが、O-157で保健所がどうも許可されんごたるといようなことで、そういうふうな問題が出てきていますけれども、やり方としては、今、物産祭りのときにみんなごちそうしたりするじゃないですか。そういうことを考えたら、食べ物に関係すれば人がいっぱい集まってくるわけですよ。しかも、寒いときに、豚汁は食べても、シシ汁は余り食べたことがない人が多いですから、絶対に私はいいんじゃないかと。

例えば、そういう行事を何かの機会の一つの節目にできるんじゃないかというふうな構想とか、武雄にある歴史と文化、そういうふうないろんな行事の中に、今は一つの例として申し上げました。山内にも、北方にもいっぱい素晴らしい行事があると思いますから、そういうのを何か連携させるものもあっていいんじゃないかと。例えば、同じシシ汁をするなら、

どんぶりは全部黒牟田のどんぶりを使うとか、みんなで飛龍窯でつくったものを使うとか、そういういろんな発想もいいんじゃないかなろうかという気も一面しておるわけです。

そういうふうなことも、これはやっぱり年寄りの発想と思ってください。ここで年寄りが登場するわけです。

武雄市はお年寄りを元気にしているかどうか、大事にしているかどうかという話ですが、ちょっとこれを見ていただきたいと思いますけれども、（資料を示す）ちょっとこれを見てください。「情熱は年をとらない。年齢に縛られていては本当に必要な人材は見つからない」と、こういうことが――私は別に年だから言っておるわけやないですよ。これは三浦さんというてから世界的なスキーヤーがヒマラヤを制覇されたときの、これは厚生労働省が市役所に張ってくださいと持ってきてあって、掲載期限が過ぎたから、私が欲しいといってもらったんですよ。いいでしょう。これもせっかくするならば、裏の通りに張らんで玄関に張ってもらいたかったわけですよ。裏の通路に張ってあるもんですから、私ぐらいしか見らんわけです。見てください。いいでしょう。でも、私はポスターを出すときは皆さんに見えんから、資料としてコピーして出すように言われたから、議会事務局にお願いして全部配っています。いいでしょう。

ここを見てください。「年齢に縛られていては本当に必要な人材は見つからない」と。要するに年寄りのパワーというものを大事にせんばいかんと。実はこれがまた「がばいばあちゃん」に関係あるわけですよ。

「がばいばあちゃん」のことを書いた島田洋七さんの対話が「毎日かあさん」200回記念ということで、12月10日曜日の新聞に書いてありました。やはりどうしても武雄におると、「がばい」と書いてあると、つい見ろうとしますから、島田さんの話ですが、その中で、実はこう書いてあるんですよ。私は6月の定例議会でも取り上げましたけれども、この洋七さんが自分は余り勉強しよらんやったと。ですけれども、やっぱり通知表をもらったときに家の者には見せにくかけん、こそっとなおしたりしよるぎ、「おまえ、通知表は」というようなことで見せたところ、1点やったと。ところが、おばあちゃんは「ああ、よかった、1点で。五つあるぎ、5点になる」と、そういう教育の仕方をしてあったということで、教育長に6月議会で取り上げてお話ししたことがございますが、その中で、実はこう書いてあるんですよ。高齢化して眼鏡をかけますが、小さい字ですけど、「うちのばあさんだけじゃないと思うよ。明治とか大正のああいう昔の人の話を、今やから聞かなあかんと思う。もう行き詰まってるて。携帯、インターネット以上、何が要るの？もう要らないですよ。だから変になっていくんですよ、子どもも。まず明るい子どもをつくることですよ。そして体力、それから勉強やと思う」と。体力をつけさせると。そしてまた、お年寄りのことを聞きなさいと。「がばいばあちゃん」のPRをするときに、これも一緒に市長に言っていただきたいと、こう思うわけです。私ももちろん、これは「昔の人の話、聞かなあかん」といって大きい記事

としてここにあるわけです。私は一般質問の準備をする中で、どういう展開でお訴えをしようかと、こういう気持ちでございましたけれども、次々に出てくるもので、資料というのはあるんですね。

私がかえって思うのは、この中で、「がばいばあちゃん」と同じぐらいに、もっと元気のいいおばあちゃんにお会いしました。先ほど本当に武雄市のために頑張ってもらっている副島病院の話が出ましたが、先週の土曜日に副島病院のリハビリに行きましたところが、あるおばあちゃんが「谷口さん、本当に市役所も一生懸命やってもらっていると思うけれども、北風の木枯らしが吹いて落ち葉がいっぱい散ってね、ちょっと用は足せんやったもんね」という話をされたわけです。何の話かということ、市役所の前の公衆便所、トイレに用足しにちょっと寄ったと。ところが、わっと落ち葉が入ってきて、そして、便器の中に落ち葉がいっぱい、つまりたまり場ですね、吹きだまりのような感じになっておった。ところが、構造上、あそこはやはり戸をあけておかんばいかんらしいですもんね。そういうことで、玄関の戸というのはおかしいですけど、トイレの中は閉まるんでしょうけれども、普通はあけてあるわけですね。安全対策とか、何かあったらいかんから、あけてある。そこに行ったところが、そしたら、用を足せんで、何人か行かれたんでしょうけれども、流せんで、そして、ちり紙が何枚か落ちておったと。ですから、それはいかんな、武雄市の観光の玄関先であるのに何かできないかなんかといって実は片づけてきましたと。「どうやって片づけたんですか、何か掃除道具があったんですか」と言ったら、「いや、手でトイレの中のものをとって捨てて、そして、ちゃんと水が流せるようにしてきました」とおっしゃったわけですよ。「ああ、ありがとうございます。手が汚れたでしょう」と言えば、「いや、手は洗えばいいですよ」と。昔の人はそうなんです。今は馬のふんも自分で拾ってくれんわけですよ。昔の人は手を洗えばいいからといって丁寧にしてもらった。

しかし、その方がおっしゃったのは、そのときに私が用を足しに行って、たまたまそうだったけれども、いつもはきれいにしてもらっているとおっしゃったから、その方は時々はそのを病院の行き帰りに通っていかれるんでしょう。下西山のおばあちゃん、82歳です。まだ気分はつやつやしている。そのときにいみじくもおっしゃったことが、市役所も手が足りんさらん、私たちはまだ元気かと。ボランティアでよかけんが、トイレの掃除は老人クラブで私たちが加勢してあげてもよかねとおっしゃったわけですよ。うれしかったですもんね、その言葉を聞いたときに。すぐ担当課に連絡をいたしました。そしたら、わざわざ何回も行ってもらって、おばあちゃんはその後は旅行されておったようですけれども、お会いしてお礼を申し上げてきたという話をきょう聞いたわけです。

そういうふうな状況からして、武雄市内の公衆トイレは今何カ所あるか、その点を一応――これは報告だけじゃいけませんので、質問させてもらいますけれども、どういう管理をなさっているかをまずお聞きしたいと思います。

そして、今のおばあちゃんについての感想をお尋ねしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

藤崎市民環境部長

○藤崎市民環境部長〔登壇〕

お答えします。

我々の方で管理している便所が29カ所でございます。

清掃につきましては、5名の方だったと思いますけれども、職員じゃなくして、予算を組みまして一般の方をお願いしているところでございます。（「おばあちゃんの感想」と呼ぶ者あり）

私も先ほど聞きまして、おばあちゃんのそういうふうにしてされたことに対しては、大変ありがたく感謝しているところでございます。

○議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

○30番（谷口攝久君）〔登壇〕

実はその後におばあちゃんが言われたことがもう一つあるわけですが、それについて、そういう方法があるかどうか。

そういう感謝を私が申し上げましたところ、私たちは時間のあるよと。暇やっけんー暇やっけんと言うとおかしいですけど、体も丈夫やし、何かそういうところでトイレの掃除でも何でんよかけんが、武雄にそういうところがあれば何かお手伝いをしたいと。だから、そういう指示をしてほしいという話をされたわけですよ。それは話しておきますからといって、具体的に一人の方をお願いして回るといわけいかんでしょうからですけども、問題は、そういうボランティアというか、そういう気持ちを持っていらっしゃるおばあちゃん、「がばいばあちゃん」のああいうふうにひたむきなことに対するほのぼのとした教育ですね、同時に、地域にもまさにそういう「がばいばあちゃん」もいらっしゃるんだということを感じたもんですから、この際、市長にその点についての受け入れというのですか、どういうふうにしたらいいかをお尋ねしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

私も大変ありがたい話で、自分ではなかなかできることではないなというふうに思って、谷口議員の御質問を聞いておったところであります。

翻って、私は3世代の大家族に生まれ、そして、育ってきました。高校まで、その家庭にありました。そのときに、先ほどの谷口議員のお言葉を聞きよったときに、うちのじいちゃん、ばあちゃんも同じことば言いよったですね。やっぱり市の職員が忙しかろうとか、議員

さんが忙しかけん自分たちでしてきたとかですね。そいけんが、ある意味、日本というのはそれが、特に、明治生まれの日本を本当につくった皆さんたちというのは残っておったと思いますね。だから、そういう意味で、日本人の遺伝子が先ほどのおばあちゃんに残っておんさったというふうに私は思っていますし、非常に大事にしたいと思います。

その上で、どういうふうにこのおばあちゃんたちに本当にがばい力を発揮していただくか。きのう私が答弁したとおり、やっぱりシルバー人材センターにその役割を担っていただくべきだというふうに思っておるわけですね。例えば、武雄に久留米のNPOとかあるわけじゃありません。だから、シルバー人材センターにまず登録をしてもらって、そこに押しつけというような形じゃなくて、一定の先ほどのサービスと言ったら語弊があるかもしれませんが、そういったところに登録をしていただいて、やりがいのある仕事をそこでしていただくことが、これは本当にいい形になるのかなというふうに思っています。

もとより武雄の場合、シルバー人材センターは一生懸命やっていると思います。しかし、例えば、沖縄であったり、大阪であったり、私もシルバー人材センターにはかかわってきました。そのときと比べると、やっぱりPRがなかなかかなですね。そういう意味で、私はそのシルバー人材センターの活性化を強く期待したいと思いますし、ぜひ市民の皆さんにおかれても、私はこういうことができるよとか、こがんことばしたかばいといったことを福祉保健部なり私なり、あるいはシルバー人材センターに投げかけていただければありがたいなというふうに思いました。

○議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

○30番（谷口攝久君）〔登壇〕

じゃ、ちょっとポスターの話に戻りますけれども、今の市長のお考えなり、そういうのは、確かにシルバー人材センターは頑張ってもらっておりますし、私もシルバー人材センターにーメンバーじゃないですよ。メンバーじゃないですけども、市の農林課が貸し出ししている市民農園を借りて、手に負えんで、ついシルバー人材センターにお願いして、どっちがシルバーかわかんようになった思い出もございますけれども、本当に頑張ってやっていただいています。

その中で、年齢の問題があると思うんですよ。例えば、ボランティアです。シルバー人材センターは余り年の多かけんだめとは言わんかわかんですけども、いろんな企業が、いわゆる何といいですか、労働をする人の募集、採用に当たっては、働きたい人の年齢を理由として募集、採用の対象から排除しないようにしなきゃいかんと、こうあります。敬老精神ということと排除するということと何かちゃんぽんになったような状況が世の中にあるような気がしますが、そういう点についての考えはどうでしょうか。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

私は人の能力、やる気というのは年齢とは関係ないと思っています。高齢者の方でも私よりも体力があったりとか、あるいは物すごいアイデアをお持ちの方がいらっしゃいます。かといって、例えば、20代以下でまだまだ半人前やろうもんと、武雄はその風潮もやっぱり強かですね。だから、そういう意味で、私は年齢とか性別とかと人の能力、やる気というのは全く関係ないと思っていますし、もしそういったことを理由にして、武雄にある企業の雇用者がそれを排除するといったら、それは私はけしからぬ話だというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

○30番（谷口攝久君）〔登壇〕

今の市長のお考えを聞いて、ちょっとほっと安心をしたというのはおかしいですけど、私はわかるつもりでございましたけど、市長が提案されるわかもん会、グループですね、研究会、もちろん若い人だけに限らず、年齢関係なく、例えば、若い職員だけじゃなくて、部課長でも若い気持ちを持った人、やる気のある人はいいいよということでしょうけれども、そういうことで、かなり若い連中が一生懸命やる気を起こして頑張っていることも事実だし、評価もしております。

ところが、人間いろいろあると思ひまして、やはり自分は若かと思つたっちゃ、年齢的に年をとっていると。私は自分で若いと思っていますよ。まだ75歳ですから、大したことないと思っています。今からだと思っているわけですよ。そういう気持ちの中ですけれども、問題は、そういうことはあり得んと思うですけれども、例えば、頑張ってきて課長になった、部長になったという方々の中に、やはりテンポについていけんと言うとおかしいですけれども、やっぱりそれぞれの生活をしたリズムが違うわけですから、リズムが違って違和感を持った人があるんじゃないかと。それが市全体の役所の活力を阻害しているということになると、やはり心配があるんだなと思うんですけれども、そういうことはないでしょうね。これは質問になるんでしょうかね。

という感じがします。でも、これは聞きません。ですけれども、そういったようないろんな立場の考え方ですね、私はいわゆる高齢者だけではできない問題もたくさんあるような気がします。でも、全体に市民の中で市長はよう頑張るばいと、思い切ってどんどんやってみてもらっていると。ところが、やはりなかなかですね、いきなりついていけん人も世の中にはあるわけですから、そういう点については、できるだけ説明責任といいますか、私もパブリックコメントというのを選挙の公約にきっちり書いてやった議員の一人ですから、そういう点はいつも考えているわけですが、やはりそういう問題を起こすときには、前も

って相談したことがかえってマイナスになることがありますね。理解してもらえん場合もあるわけですよ。ですけども、そういう問題の取り組み方というのたくさんの市政の中では、将来、ここをもっと大きくするためには必要ではなかろうかという気が一面するわけです。

この問題はここまでにいたしまして、次に、いじめの問題、心の教育の問題についてお尋ねをしたいと思います。

これは教育長にお尋ねしますけれども、きょうも少子・高齢化の問題と同時に、いろんな問題がございましたけれども、いじめの問題がありまして、いじめの問題は非常に深刻な問題でございますが、このいじめの問題の中で、実はきょうは金子みすゞの本を図書館から借りてまいりました。この中で「わたしと小鳥と鈴と」というテーマでございますけれども、「わたしが両手を広げて、お空はちっとも飛べないが、飛べる小鳥はわたしのよう、地べたを早くは走れない。わたしが体をゆすっても、きれいな音は出ないけれど、あの鳴る鈴はわたしのよう、たくさんの歌は知らないよ。鈴と小鳥と、それからわたし、みんな違って、みんないい」と。「みんな違って、みんないい」、この最後の1行ですね、これが私は心にじんときくるものがありまして、金子みすゞのこの言葉を議長をさせてもらっているときに成人式で若い人に話をしました。その当時、ちょうどオンリーワンというですかね、ナンバーワンじゃなくていいと、オンリーワンでいいから自分の生き方という話題が生まれ、私はそれと対比しながら話をした、みんな違っていい。

私はいじめの問題は、自分と違うものを排除しようとするときに起こるんじゃないかと、一面でそういう思いもするわけです。この言葉といじめとの関係ですね。教育長のきのうからの答弁では、武雄市においても今は件数は多くないんですけれども、ただ、表面上出てきたいじめと同時に、もう一つは、例えば、なぐられたとか、押されたとか、言葉でいろいろ言われたとか、ダサいとか、汚いとか、臭いとか、そういうふうな言葉以外の、例えば、無視することはいじめじゃないかと思うわけですよ。みんな違って、みんないいと、お互いがお互いを尊重し合う、そういう気持ちを持ったときにいじめはなくなるんじゃないかと思えますけれども、現実問題としては、いじめのために命を落とす若い人もいますし、子供もいます。そのたびにいろんなトラブルも起こっています。

それについては、教育長の考え方と現状ですね、武雄市におけるいじめ対策。そして、市長は今度若い子供たちにも話をしてもらおうということで、きのうも質問があつてありまして、お答えいただきました。単に5年生、6年生だけでなく、本当はもっと小さい低学年、いわゆるいじめは2年生、3年生から始まっているわけですよ。後で事例をお話ししますけれども、そういうことで考えているわけですが、まずは教育長から、それについての考え方を承りたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

庭木教育長

○庭木教育長〔登壇〕

今の質問に答える前に、一つだけ訂正をさせてください。

先ほど古川議員の質問の中で、大川小学校の現在の人数を120名ぐらいと言ったと思いますが、先ほど調べてみましたら146名でございまして、訂正をさせてください。

さて、いじめについてでございますが、非常に深刻な子供たちの世界が広がっているということは皆さん御承知のとおりでございます。今、金子みすゞの詩を朗読いただきましたが、そろえの教育というものを進めますというと、そこに排除という世界が生まれてまいります。ここが実はいじめの一番発生しやすい原点である。そうしますというと、やはりきのうも申ささせていただいたと思いますが、違いを認め合う、ここがやはり原点においた教育実践の場の展開でなければならないし、家庭教育におきましても親は違いを認める、違いに価値を意味づけをしていく、これが非常に大事だろうと、こういうふうに思います。

それで、これまでもいろいろといじめ問題等について、私どもの方に報告、相談等を受けますものを見てまいりますというと、やはりその違いというものの世界が弱いというもののも結構ございました。そういう意味で、これから違いを認め合う学級集団づくりと、これが非常に大事であるし、一人一人の自尊感情を大事にする、そういう世界づくりも非常に大事であるということを現場職員ともども共有をしていかなければならないと思っています。

○議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

○30番（谷口攝久君）〔登壇〕

今、いじめの問題が出てまいりましたけれども、めったにこういうことをお話しすることにはなかったんですけれども、私の子供は3人いますが、上の双子、未熟児で生まれましたので、体は小さいし、なかなか学校でもいじめられておりました。それは知りませんでした。ですけれども、近所の子供が「礼史君はかわいそうに。いじめられて、毎日トイレに行って学校に行ってる」という話をしたわけですよ。子供たちは友達のことは余り言いません。もちろん大きくなっていますから思い出という形になりますけれども、同じではあると思うんですよ。学校は好きだから行きたいんですよ。友達にも会いたい、勉強したい。でも、学校に行ったら教室に入ったらいじめられると。だから、その間、トイレに入って、授業が始まったら、ぱっと教室に入って勉強に入る。それで、終わったら、ぱっとまたトイレに隠れている、そういう状況が続きました。うちは双子ですから、そういう状況でした。高校に行っても、1人はいじめられました。

ですけれども、私は子供にこういうふうにしたわけですよ。いじめられん方法が三つあると。しかし、その前に、本当はこれはいけなかったんですけれども、「あなたも何かいじめられるようなことをせんやったね」と、つい言うたわけですよ。もちろんかぶりを振りま

した。もちろん相手をいじめるようなことはうちの子はしないと、私はそう思っていました。でも、そう言いました。やはり先生方が「あなたが何かしたとやなかね」と仮に学校でいじめられている子供に言ったときに、いじめられている側が悪いように印象を受けるようなこともあるわけですから、いじめ対策については大事なことだと思います。ですけれども、そういうふうな問題がありました。

そのとき、私はこういうふう子供に教えました。いじめられん方法が三つあると。一つは、まず、相手よりけんかに強くなれと言いました。そうすると、相手はいじめられんですから、逆ですからね。要するに弱者になるなと。いわゆる弱い者いじめという言葉を使っちゃいかんと今は言われているわけです。弱い者いじめという言葉はいかんとということをいつか教育長からお聞きしたことがありますけれども、とにかくそのときは私はそう言ったわけです。相手よりけんかが強くなれと。しかし、未熟児で小さい体ですし、それは無理かわからん。

そしたら、二つ目を教えてあげると。二つ目は、勉強でもスポーツでも何でもよかけん、人に一目、二目置かれるような人間になれということと言いました。あれは勉強できるけんなど、ちょっといじめを敬遠するような状況になるでしょうし、スポーツはかなわんもんなとか、いろいろあると思うんですよ。ですけれども、それじゃ、スポーツはできんもんですから勉強しようとして一生懸命勉強したら、かえっていじめられるようになったわけです。余り成績がーちょっとよ過ぎたと言えはおかしいですが、いじめられるようになったんですよ。そしたら、スポーツをやれと言いました。スポーツをやって、とうとう高校に行ったときは陸上部のキャプテンまでなって、長距離を走るようになったわけです。

ところが、もう一つ、2番目の子供に言いました。もう一つ方法がある。もう一つは、とにかく人より優れた者になるとまでは言い切らんなら、最後の手段が一つあると。それはなぐられたときによける練習をせろと言いました。なぐられても、なぐられても、ぱっとよけたら、相手はとうとうくたびれて最後はなぐらんごとなるじゃろうと。しかし、そのままをやめたら負け犬になると。だから、相手がくたびれたころ、やっつけろと、私は男親としてはそう言ったわけです。しかし、それが息子がボクシングをするようになるとは思わなかったわけです。あの2番目のボクシングは、そういういじめ体験の中から出てきたものが心の中にあったんじゃなかろうかと思います。でも、なぐられても、なぐられても、最後は相手を倒す、そういう気迫だけを持ってやれと、よう言いました。

しかし、この三つの教えと言うとおかしいですけれども、これが必ずしもすべての子供に適用するとは思いません。ですけれども、少なくともですね、よく言われます。「おたくの子供さん頑張ってるですね」と言われてうれしゅうございますけれども、そういういじめられた体験というのがあったわけです。

ところが、私は一番強かったのは家内だと思います。そういうことを聞いてから、実は私

は学校には言いませんでしたけれども、学校に出向いて行って、相手の子供にも会って、親にも会って、いじめんようにしてほしいと言いにいって行っておるわけですよ。一番下にもう1人おりますが、その子は柔道をやって元気でしたけれども、2人の兄貴がいじめられんように、一番下の子がまた頑張ってきたわけですよ。今、NPOをやっている子ですけども、とにかくですね、おまえはうちの兄ちゃんばいじめたらといって、けんかしに行くわけですよ。いじめた者とけんかしに行くと。本当にこれは笑い話じゃないですけども、それくらいに深刻な問題でした。ですけども、そういう問題を何とかクリアして成長してくれましたけれども、私は今そういう問題を抱えたときに、いじめの問題の深刻さというのを、たまたま私たちはそういうことを切り抜けたからですけども、今からの子供たちにとっては本当に生きるか死ぬかの問題ということになりますと大事なことですから、その問題について、私はあえて一つの経験としてお話ししましたけれども、私がお話したのは一つのストーリーとして聞いてもらって結構ですけども、現実には自分の子供がそうして立ち上がっていったという一つの経過。

もう一つは、実は学校の現場でいじめられたときの学年が3年、4年の学年でした。ですけども、そのときは新任の先生が来て、いじめられていることがわかって、どうしても対応ができなくて、その先生は本当に純粋な先生でしたから、つい自分まで泣き出してしまおうと。いじめを阻止、あるいは指導するというふうな立場以前に、自分が何でもかぶってしまうという本当につらい経験を先生はされました。ところが、5年になって担任がかわりました。かわったら、本当に生き生き勉強するようになってきたわけです。担任の先生のせいじゃないですよ。クラスがえとか、いろいろな問題もあるでしょうけれども、しかし、5年になったら、とにかく目標を達成するように頑張るようになったわけです。ですから、やはり先生の問題とか環境の問題が子供たちのいじめにとっても随分影響があるんだなということをしみじみと感じたわけです。

そういう意味で、やはり小さい学校というのはおかしいですけども、1クラスしかない学校、あるいは2クラスで人数が少ない学校はクラスをかわっても、とにかく1年生のときにいじめられた子は6年までずっといじめられるわけですよ。そういう問題はどういうふうにして学校としては対処してあるか、そういう点について、教育長、所見があれば聞かせていただきたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

庭木教育長

○庭木教育長〔登壇〕

単学級の場合には、往々にして初期の対応を誤りますという、そういうことが起こりがちなんですね。ですから、このあたりは非常に現場教師としては気を引き締めていかなければならないわけですが、私が今、現場の方をお願いをしておりますことは、組織として常に

動ける学校体制をつくってくれと。担任だけではわからんと。だから、小さい学校はとにかく組織として動ける、そういう体制強化を図っていただけないでしょうかと。そして、学校職員の中で心配であれば、やはり素早い情報を関係の皆さん方に共通に提供いただき、そして、客観的な視点での会議を持っていただきたいと。これが主観的な情報で、一方には流し、一方には流さないとなりますという、非常にこれは誤解を生むわけでございます。ですから、今申しましたようなことで現場の方には今お願いをしております。

○議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

○30番（谷口攝久君）〔登壇〕

教育の審議会ではいじめ対策について、いろいろと論議が出されて、今まではいじめられる側だけのことで対応をいろいろと言っていましたけれども、いじめる方の問題がなかなかきちんとした形で出てこない。だから、学級分離とか、あるいは指導とかと、いろいろな問題がございました。でも、本当にそういう問題等については、市長も今度子供たちと対話をされますので、どういうふうな点がポイントなんだろうかな。話の中身を先に言えというわけにいきませんけれども、例えば、いわゆる政府がいじめの問題に関する8項目の緊急提言をするとまとめてありますが、それに関する問題で市長が感じのところをお話しいただきたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

私が市長と子どもと語る会で語ろうと思っているのは、私は30代後半になります。それでも、いじめられた方、いじめた方、どちらも心の傷になっておるわけですね。だから、今の自分の目線に立って、これは一生引きずる問題だということを私の言葉で語りたいというふうに思っています。

それと同時に、私はいじめられている子に対して、さっき谷口議員の言葉の中に二つ目の言葉がありました。何か1個でもいいじめより方に比べて得意なところのあるぎんた、それは自信につながると思うとですね。実際私はいじめられたことはないです。いじめたことも多分ないです。しかし、私は一つ思い出があります。というのも、小学校2年生のときに、私はぼおとしておったとですね。でくの坊と言われよったです。がたいも大きかったけんですね。しかし、相撲大会で、あれよ、あれよと勝ったわけですね。それを境に、今、親と話したときに、あの日をきっかけに少し変わったかもしれんとやっぱり言われたわけですね。子供にとって自信というのは、言い方は悪いかもしれませんが、やっぱり相手よりちょっと自分が上ばいというふうに思ってもらえるような話をぜひ私は取り入れたいというふうに率直に思いました。

そういう意味で、話は戻りますけれども、いじめる方、いじめられる側に対して、今の私の気持ち、そして、その年代の気持ちですよ、大人になっても響くけんがやめとけという気持ち、それと自信を持つようにと。そして、もう一つがやっぱりつながっているんだというメッセージを自分の言葉で率直に語りたいというふうに思っておりますし、教育長にも同席してもらいますので、教育のプロ、あるいは教育として私が足りない部分というのは教育の立場からきちんとフォローをしていただこうというふうに考えております。

○議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

○30番（谷口攝久君）〔登壇〕

確かに今、市長の話がありましたように、そういう視点で子供たちに語りかけていただけたら、子供たちも胸を開いて、いろいろ感じる場所があるんだろうという期待をしておるわけです。

とにかくいじめ問題については、いろんな意見があります。こうしたらどうかとか、逆にいじめる子供をきちんと取り締まりはおかしいですけれども、厳しくやれとか、いろいろありますけれども、いわば実効性の問題があるわけですよ。本当に効果のある、そして、心の問題がいじめの問題ではありますので、そういう実効性を伴わないいろんな批判とかいうのは、むしろマイナスになるような気も一面するわけですよ。私はとにかくいろいろと問題に取り組んでいる子供たちとも話をしますけれども、それこそ、まさに命がけでそういう問題に取り組んでいるような気がいたします。

このことについての最後に一言申し上げますけれども、実はいじめた子供がスポーツをやっていました。後になるとお互いがそこらを理解したと思いますけれども、本当にスポーツで頑張ったときに、うちの子供のいじめられた2人が一生懸命拍手を送っていたことを今思い出すわけですよ。そういうことを考えましたときに、やっぱりある時期にきちっとそういう関係を修復しておけば、それは大人の責任でもあるし、学校とも、あるいは地域の責任でもあろうかと思えますけれども、そういう問題があろうかと思えます。

一応この問題については、やっぱりお互いがいじめの問題を他人のことと考えないで、本当に身近な問題としてともに考えてあげる必要があるんじゃないかと。今、子供たちが何かやっていると、やっぱり途中でも注意します。帰っていると、「用心してね」と必ずどこの子供にも私は声をかけてあげますけれども、なかなか今の世の中は変に声をかけると変なふう言われまして、難しい問題があります。ですけれども、基本ですから、やっぱり少子・高齢化といっても、今ある子供たちは元気で育ってもらわんと意味もないわけですから、そういうことを感じるわけでございます。

続きまして、いわゆる弱い人に対する問題、先ほど元気なお年寄りを紹介しましたけれども、お年寄りはずしも元気な人ばかりじゃないわけですよ。本当にお年寄りの方はいたわ

ってあげにゃいかん。今までのことに感謝しながら、いたわってあげにゃいかん問題があります。あと残りがちょっとございますので、その間にお話ししたいと思います。とにかく現在、武雄市における高齢者対策ですね、きのうからの話も出てまいりましたけれども、例えば、高齢者の課税の仕組みですね、高齢者控除とか、いろんな問題が税法上も非常にマイナスになっているし、病院代、治療費にいたしましても2割負担から3割負担まで、本当にお年寄りの受難な年になるうと。少子化の問題もそうですけれども、国は第1子、第2子、今まで5千円ずつやっていましたね。第3子は10千円だったわけですよ。ところが、それじゃ効果がないと。本当に子供を育てるのにいかにお金がかかるかといって、結局きょう付でですか、第1子は10千円やると。第2子も10千円だと。第3子は10千円やっているけん、本当に毎月そういう対応をして、少しでも子供たちが健やかに伸びていくような対応をし、子育ての苦労もわかったというふうな形で、きょう朝、出かける前にニュースでも言っていました。ところが、お年寄りについては、なかなかそういうわけいかんわけですよ。

そういう点について、高齢者対策について、武雄市として取り組んでいることについてお話をいただきたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

中原福祉保健部長

○中原福祉保健部長〔登壇〕

武雄市の高齢者対策ということでございますが、武雄市のために大いに貢献していただいた高齢者の方が豊かな人生、生きがいのある人生を送っていただくように、いろんな事業をしているところでございます。

一つとしては、いわゆる介護が必要になった場合は介護保険事業で介護支援を行っておりますし、元気な方については、生きがい対策として就労支援の場としてシルバー人材センターの活動に参画をしていただくということ等に取り組んでおります。

また、高齢者の健康づくりのため健康増進課の方で事業を推進いたしておりますし、いつまでも達者か高齢者であられるように、平成12年にたっしゃかプランというのをつくりました。実は合併をして、本年度からたっしゃかプランの見直しに取りかかっているところでございます。高齢化社会を迎え、ますます元気に暮らしていただけるよう、たっしゃかプランの充実を進めたいというふうに考えているところでございます。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

今後、武雄市では予防医学に力を入れていかなければいけないというふうに思っております。その中で一つ、私、具約、公約にも入れておりますけれども、予防接種の見直しを私はせんばいかんというふうに実は思っております。というのも、ちょっとこれはまだ詳しく

精査したわけじゃありません。しかし、予防接種の中身が充実しているところは結果的に医療費がかからないという相関関係がどうもあるようです。これは厚生労働省と今後詰めていきますけれども、そういう意味で、病気にならないとか、あるいは病院にかからない。それは日々の健康を維持していくための健康講座もあるかもしれませんが、それと同時に、それと並ぶものとして予防接種の見直しができないか。これは医師会から内々に私の方に話も来ております。そういう意味で、どういう予防接種の仕方があるか。インフルエンザにもいっぱいあるらしかですね。今、ストマックフルというともあるらしかですね。胃がインフルエンザにかかる。それで命を落とされる方々とか、それが肺炎につながっていくとか、それを防止するための防波堤になるようなものを今後検討していきたいというふうに考えております。

○議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

○30番（谷口攝久君）〔登壇〕

今、市長がお年寄りが病気する前に予防接種の問題ですね、予防の問題を取り上げてもらって取り組むということでございますので、確かに必要なことだと思って期待をしておるわけです。最近、予防接種となると、インフルエンザは別として、子供たちのＢＣＧとか、あるいはポリオとかなんとか、要するに予防接種でかえって病気したとかといろいろ言われたために、何か予防接種をちゅうちょしているというふうなことまでの時代ですから、それは確かにそういうことはあったかもわからんけれども、本当に健康であるためには、病気する前が健康でなきゃいかんわけですから、そういう意味で大事なことだと思います。

同時に、例えば、健康増進課にいたしましても、お年寄りの健康づくりは、かなり高齢化して治療費だって高くなっていると。あるいはまた、介護保険だって料金が上がっていると。きょうは時間があと15分しかありませんので、介護保険の問題についてはなかなか述べる時間が足りませんけれども、そういったような健康づくりについて、どういう取り組みをするか、そういう点をお尋ねしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

中原福祉保健部長

○中原福祉保健部長〔登壇〕

健康づくりについてお答えいたします。

まず、全体的な健康づくりといたしまして住民基本健診がございます。その他、肝疾患、結核疾患、動脈硬化検診、各種がん検診、それから、これはお年寄りが中心となろうかと思いますが、骨粗鬆症の検診等を行っております。その他、健康づくり教室、介護予防教室、老人クラブの出前講座の中で軽運動の推進とか、そういう病気にならないための予防事業に取り組んでいるところでございます。

○議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

○30番（谷口攝久君）〔登壇〕

前段で出てまいりました元気な武雄のがばいばあちゃんですかね、そういう方は、私はちょっと名前を申し上げませんでしたけれども、これは公にしてもいい方ですけど、井上ナミさんとおっしゃいまして、下西山の方だそうです。本当に下西山には心の優しいお年寄りがたくさんいらっしゃるなと思います。

そういうことで、本当にボランティア活動でもどんどんやっていくというふうな気持ちをお持ちでございまして、そういう元気なお年寄りと同時に、やっぱり市役所の階段を上にしても用心しながら上っていく方もいらっしゃると思います。早速、いわゆる裏の階段には手すりをつけてもらって、きょうもまた上がってきましたけど、非常にありがたく思いました。

同時に、ただもう一つ、これもせっかくなつくってもらってから、こう言っては申しわけないんですけど、もう一声心を込めてほしいのは、実は通常の階段は、市役所の中央階段はあれでいいんですよ、傾斜が緩いですから。傾斜が強いところは、場合によっては握ったら体の重い人はつるっと滑る可能性があるんですよ。つるっとします。そうすると、玄関の入り口にあるのは、そういう滑りを予防するための措置がしてある心の込められた手すりなんですよ。ところが、せっかくしてもらったのにぜいたく言っては悪いですけども、行ってみてください。自分が手すりを握りこうしたら、つるっと滑ります。そうすると、かえって事故が起こる可能性があるような気がするわけですよ。（笑声）いや、本当の話ですよ。これは健康な人にはわかりませんが、せっかとお金をかけてつくったんですよ。立派なもんですよ。（発言する者あり）いやいや、それは今つけよるとは私が言ってきました、そういう問題についてちゃんとしてほしいと。要するに問題は、テープをつけるというよりも、そういうものをするときに前もって、今、少し穴のあいているのがあるんですよ。それをつければコストも安いわけですよ。ですけども、そういうことは別として、そういう取り組みをしてもらったらいいいですよ。するんだということを言ってもらえば、それで結構ですよ。どうぞ。考え方を申し上げたんです。

○議長（杉原豊喜君）

大庭総務部長

○大庭総務部長〔登壇〕

今、谷口議員がおっしゃった東側の階段ですけども、これについては、滑りどめをきのうつけさせていただきました。

○議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

○30番（谷口攝久君）〔登壇〕

早速していただいたとすれば、したと言ってもらえば私は質問せんでもよかったんですが。

私が申し上げたいのは、そういう大事なことは、いきなりここで申し上げるんじゃなくて、前もって申し上げた上でしか私は言いません。少なくともその時点までは、私がきのう帰るときまでの時点ではきちっとでき上がっていなかったから、そういう問題は、同じつくるならば、そういう心を込めたものをしてほしいということなんです。しかも、コストが安くできるとすれば、そうだと思います。

次に移りますけれども、今、実は障害を持つ方々にとっていろんな問題がございます。順序は逆になっておりますけれども、心の福祉、私は福祉のいじめも心の福祉の問題があるような気がいたします。

今、武雄市の観光問題にしても、いろんな方々が武雄に見えたときに一番大事な問題は何かということ、武雄にせっかく来てもらったら、武雄のことを知ってもらいたいことだと思います。知って来る人も、来てから知る人もいらっしゃるわけですよ。そのときに最前線に立っているのが、いつか申しあげましたように、はりとか、きゅうとか、マッサージとか、あんまをしてもらう、そういう方々が観光客の最前線に、おふろ上がりに肩をもんでもらう、腰をもんでもらう。その中で、よもやま話で出てくるのは武雄はどがんところですかという話なわけですよ。そしたら、武雄のことをその方々にまず知ってもらえば何よりもということで、ここにちょっと資料がありますけれども、歴史資料館では武雄に列車が来た日ということで、そのときは実際に目が見えない方でも展覧会に行って、さわってみて初めて、実感としてあって、その中で話をしてもらいました。

そのときの話が出てきて、実は読み聞かせの会というのがありまして、その会がいわゆる市報を読んでもらっていると。テープに吹き込んでもらっていると。それを聞くと随分と武雄のことに詳しいわけですよ。そしたら、武雄の歴史と文化、伝統、山内、北方を含めて話をしてほしいと。それを今、読み聞かせの会が録音テープに吹き込んで、それを進呈してもらうような努力をしております。

それを受けて市長にお尋ねしたいことが――お尋ねしたいというか、報告をせんといかんことがあるんですけれども、例えば今、市長は武雄に学校をつくりたいと、大学をつくりたいという話等もしてあります。その皆さんがこういったように安心・安全・信頼ということの中で、手技療法士、要するには、きゅう、マッサージの方々が自分たちの学校をつくらうじゃないかと。そして、武雄に九州いっぱいそういう不自由な方々に集まってもらって、今は目の不自由な方々の仕事まで健常者がとってしまう時代ですよ。それを自分たちが学校というとおかしいですけれども、大学と言えるかわかりませんが、そういう専門的なものを、自分たちが持っているノウハウを生かした学習塾的な大きいものをつくって、武雄をそういうもののメッカにしたらどうかというぐあいで今検討しているということで資料をいただきました。

この資料を執行部の方にもお渡ししておきましたので、今後そういったようなものに取り組みたい、中身はまだお読みになっていないかわかりませんが、そういう取り組みをするということがありますので、本当に自分たちもそういう努力をしたいと。そして、武雄市にお世話になっているからという話でございましたので、あえてそういう取り組みをしていますので、そういうときはぜひひとつ力をかしていただきたいと、こういう気がするわけです。

それについて、市長、お考えを聞かせていただきたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

答弁申し上げます。

ちょっと中身を見てから慎重に判断したいと思いますけれども、御質問の中身からすれば非常にいい話だというふうに思っておりますので、市として支援ができるような気がしますので、またちょっと資料をきょう議会が終わったら読まさせていただきます。

○議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

○30番（谷口攝久君）〔登壇〕

あと3分ですが、2分は余裕を残します。あと1分で申し上げますけれども、実はきのうから山内のことがいっぱい出てきまして、山内は大変なところばいねと思っていました。しかし、きょう手にした新聞には、本には「山内町の手前みそ」ということで、山内というのは武雄よりもはるかにすばらしいところですねということを感じるような資料が出てまいったわけですが、これについては別として、要するにこういう問題の中で、今、武雄市の市立図書館では本当に子供の童話の世界をいろんなもので見事に再現した展覧会がやっているわけです。ところが、せっかくの企画が広報にはことし載っていない。1月号に載るといって、もう終わってしまうわけですよ。そういうふうな取り組み、それからもう1点は、本当に苦口ですけども、武雄市の文化財の広報12月号を見ても、さっき言いました流鏝馬、本当に心がけて一生懸命長く続いた流鏝馬の記事が間違っているわけですよ。武雄がきちっとした伝承をしたいと思うなら、きちんとしたやり方をしてほしいということを申し上げて、終わりたいと思います。

終わります。